

## 令和4年度 第101回全国高校サッカー選手権大会 総評

報告者：高体連技術委員 庄和高校 野木 悟志

令和4年度第101回全国高校サッカー選手権大会が12月28日（開会式・開幕戦）から1月9日（決勝戦）の期間に開催された。優勝は岡山学芸館高校（岡山県）、準優勝に東山高校（京都府）、3位に神村学園高校（鹿児島県）と大津高校（熊本県）という結果となった。初優勝を懸けたチーム同士の決勝は、岡山学芸館が3-1で東山を破り、2大会続5回目の出場で初優勝を果たした。岡山県勢としても初制覇となり、全国3,883校の頂点に立った。岡山学芸館は攻守の切り替えの早さと豊富な運動量、洗練されたチームワークを発揮し、決勝を含めた全6試合中4試合で3得点以上をマークした攻撃力と連動した粘り強い守備で日本一に輝いた。神村学園との準決勝では同点で迎えた後半に2度の勝ち越しをされながらも、その度に追いつく粘りを見せ、最終的にPK戦で勝利を収めた。この試合に代表されるように今大会では接戦や劣勢な展開が多くあったが、ハードワークと強いメンタリティー、そして驚異的な粘り強さで勝利をつかみ取り、試合を重ねるごとに個とチームがたくましく成長を遂げていった。まさに優勝するにふさわしい素晴らしいチームであったと言える。

本県代表の昌平は、2回戦近江（滋賀県）と対戦した。序盤から両チームとも素早い切り替えと強度の高い中盤の攻防で主導権を奪い合う。昌平は右SH⑩荒井のドリブル突破やボランチ⑦土谷、⑧長の緩急をつけたパスワークから相手ゴールを目指す。対する近江は前線からの連動したプレスと5バック気味の守備ブロックを併用しながら昌平の攻撃へ対応し、奪ってからボランチを軸にテンポ良くボールを動かしながらサイドを起点にチャンスを作り出す。時間の経過とともに徐々にボールを保持する時間が増えた昌平は両SH⑩荒井、⑪篠田の力強いドリブルとボランチ⑦土谷、⑧長からのタイミングの良いくさびのパスで中央を崩しにかかるが、近江の強度の高い組織的な守備の前にゴールを割ることができない。拮抗したゲーム展開が続くなか、スコアレスで前半が終了する。後半、個々の技術が高く、攻撃のポイントをサイドに置きながら流動的なポジションチェンジとコンビネーションを駆使して相手ゴールに迫る昌平がペースを握る。すると55分、昌平はCKのこぼれ球に反応した左SH⑩篠田が豪快なミドルシュートを突き刺し先制に成功する。ゴールで勢いづいた昌平であったが、61分近江に左サイドを連係で攻略されて失点を喫し、同点に追いつかれる。その後、一進一退の攻防が繰り返されるなか、74分に昌平はビルドアップから中央を崩すと途中出場のFW⑩伊藤が見事なターンから右足を振り抜き決勝ゴールを決める。後半アディショナルタイムにも左SH⑩篠田の得点で追加点を奪った昌平が3-1で勝利を収め3回戦進出を決めた。

3回戦は、今年度全国高校総体覇者の前橋育英（群馬県）と対戦した。15,372人の観衆が集まった今大会優勝候補同士の一戦は、早々に試合が動いた。3分、昌平FW⑫上野の抜け出しにGKが反応し、こぼれ球を回収したMF⑩荒井がロングシュートで先制する。失点した前橋育英はボランチを中心に長短のパスを織り交ぜて昌平守備陣を崩しにかかる。

13分、前橋育英に中央突破を許し同点とされる。その後、攻守の切り替えの早さで上回る前橋育英が試合を優位に進めるなか、昌平はMF⑩篠田、⑪大谷がポジションを変えることで流れを引き寄せようとするが、相手のプレッシングの早さにチャンスを作ることができない。一進一退の攻防が続くが、同点のまま前半が終了する。後半、昌平は攻守でアグレッシブさが光る前橋育英に攻め込まれる時間が続くなか、50分に右サイドを崩されて2点目を奪われる。その後も前橋育英が出足の鋭いプレスでボールを奪うと、多彩な攻撃から昌平ゴールに迫る。同点に追いつきたい昌平は、後半開始から投入されたFW⑨小田が裏への抜け出しから決定機を迎えたが、シュートは惜しくも枠をとらえることができない。さらにFW⑫伊藤を投入して攻撃の枚数を増やし攻勢に出たが、最後まで前橋育英の強度の高い守備を崩し切れずに、1-2で惜敗した。

残念ながら3回戦敗退という結果になったが、攻守一体となったサッカーを高いレベルで発揮し、埼玉県代表としてのプライドを持って戦い抜いた昌平の健闘を称えたい。そして、今大会での経験を糧にさらなる進化を遂げることに期待したい。

今大会を振り返ると、全47試合中、1点差の試合が19試合（前回大会18試合）、PK戦の試合が12試合（前回大会7試合）といずれも前回大会に比べて増加したことから分かる通り、どちらが勝ってもおかしくない拮抗した試合が数多く展開された。この要因の一つに守備力の向上が挙げられる。前線からプレスをかけるチームや守備ブロックを形成するチーム、その両方を併用するチームなど各チームによって守備のやり方はさまざまであったが、チームとして意図的にボールを奪うための守備戦術が確立され、選手間でしっかり共有されているチームが多く見られた。また、ゴール前まで攻め込まれた場面では、間合いを詰めてシュートを打たせなかったり、体を張ってシュートブロックしたりするなど集中した粘り強い守備でゴールを死守していた。個においても、球際の強度やボール奪取能力、危機察知能力の高い選手が守備の要として活躍し、チームを勝利に導いていた。一発勝負のノックアウト方式を勝ち進むために、多くのチームが守備の強化にフォーカスしたトレーニングに時間を費やし、今大会に臨んでいたことが随所にうかがえるような大会結果と内容であったと言える。そして、上位に進出したチームは守備力に加え、質の高い攻撃も備わっていた。特に、サイド攻撃の質が高く、相手のプレッシャーが強い中央よりもサイドから攻撃を仕掛け、相手ゴールに迫っていた。個のドリブル突破やSBの積極的な攻撃参加、コンビネーション、相手SBの裏へのランニングなどからサイドを攻略しては、精度の高いクロスとシュートから多くの得点を生み出した。優勝した岡山学芸館は準決勝と決勝で奪った6得点のうち、4得点（OG含む）がサイド攻撃から挙げた得点であった。ゴールを奪うため、そして勝利をつかみ取るためにサイドを起点とした攻撃が非常に有効であったことがうかがえた。進化と発展が著しい高校サッカーにおいて、組織的かつ強固な守備を高いレベルで発揮できるチームが増えてきているなか、今後はサイド攻撃をより一層磨いていくことに加え、相手のプレッシャーが厳しい中央を突破できる攻撃力を高めていくことも必要なことであると言える。

昌平は7年連続で高卒Jリーガーを輩出し、世代別代表候補選手も多く、全国トップレベルの強豪校である。その昌平のように全国レベルのチームが埼玉県内で複数出てくることで、県内の競争がより一層激しくなる環境が作られていく。そして、厳しい埼玉県予選を突破したチームが全国大会でも良い結果を残すことへとつながっていく。今後の埼玉県内の各チームの強化と躍進を期待して総評とする。